



Title	Self-reported hearing difficulty and hearing impairment in Japanese people living in a community
Author(s)	岡本, 光明
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45215
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	岡 本 光 明
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 8 5 4 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科社会医学専攻
学 位 論 文 名	Self-reported hearing difficulty and hearing impairment in Japanese people living in a community (地域住民における聴力障害とその自覚の訴え)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 多田羅浩三 (副査) 教 授 的場 梁次 教 授 久保 武

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕聴力障害は人々の QOL に大きな影響を及ぼすと考えられ、多くの調査・研究が行われているが、地域住民を対象とした聴力障害とその自覚の訴えについての調査・研究は少ない。今回、われわれは地域住民における聴力障害とその自覚の訴えの関連を明らかにするため、S 市の老人保健法に基づく基本健康診査に加えて耳鼻科的な問診および診察、聴力検査を実施し、分析を行った。

〔方法ならびに成績〕調査対象は平成 13 年 7 月から 12 月の間に S 市保健センターで老人保健法に基づく健康診査および耳鼻科的な問診、診察、聴力検査を受診した、40 歳から 85 歳の市民 918 人である。聴力障害についての自覚の有無、その他の問診を行い、耳鏡にて診察し、1 kHz と 4 kHz の聴力検査を施行した。データ解析には SPSS を用いた。

聴力障害の自覚を訴える者は男性の 40 歳代で 30.4%、50 歳代で 29.0%、60 歳代で 34.9%、70 歳以上で 33.3% であり (p for trend < 0.450)、女性では、それぞれ 18.0%、29.6%、50.3%、48.8%であった (p for trend < 0.001)。悪聴耳で 30 dB を聴取できない者の割合は、1 kHz において、男性の 40 歳代で 0.0%、50 歳代で 11.0%、60 歳代で 15.1%、70 歳以上で 50.0%であり、女性では、それぞれ 2.2%、10.4%、30.7%、58.5%であった (男女とも p for trend < 0.001)。同様に 4 kHz において、男性の 40 歳代で 31.9%、50 歳代で 49.0%、60 歳代で 64.5%、70 歳以上で 85.0%であり、女性では、それぞれ 3.4%、20.9%、36.8%、82.9%であった (男女とも p for trend < 0.001)。聴力レベルを 30 dB (30 dB 以下)、40 dB (31 dB から 40 dB)、50 dB (41 dB から 50 dB)、51 dB 以上に 4 区分して聴力障害の割合をみると、男女とも 1 kHz および 4 kHz のいずれにおいても、年齢とともに有意に聴力障害を有する者の割合の上昇がみられた (いずれも p for trend < 0.001)。1 kHz の聴力レベル 30 dB を 1.00 とする聴力障害の自覚のオッズ比 (性、年齢、騒音暴露、耳疾患、耳鳴、4 kHz の聴力レベルで調整) は、40 dB は 1.74 (95%信頼区間 1.02-2.96)、50 dB は 3.37 (95%信頼区間 1.28-8.87)、51 dB 以上は 4.97 (95%信頼区間 1.37-18.10) であった (p for trend = 0.003)。同様に、4 kHz の聴力レベル 30 dB を 1.00 とする聴力障害の自覚のオッズ比 (性、年齢、騒音暴露、耳疾患、耳鳴、1 kHz の聴力レベルで調整) は、40 dB は 1.53 (95%信頼区間 0.94-2.48)、50 dB は 2.59 (95%

信頼区間 1.47-4.54)、51 dB 以上は 1.83 (95%信頼区間 1.05-3.19) であり (p for trend=0.012)、それぞれの聴力レベルでにおけるオッズ比は 1 kHz が 4 kHz より大きかった。

[総括] 地域住民の聴力障害の自覚の訴えは、性、年齢に加えて、騒音暴露、耳疾患、耳鳴の影響を考慮しても、1 kHz と 4 kHz のいずれの聴力レベルとも有意な関連がみられた。また自覚の訴えは 4 kHz に比べて 1 kHz の聴力レベルとの関連がより強いことが示された。高齢者の増加にともない聴力障害を有する者の数の増加が危惧されている現在、1 kHz と 4 kHz の聴力障害と自覚の訴えの関連の違いを考慮して、地域住民の聴力の評価を行っていくことの重要性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、地域住民における聴力障害とその自覚の訴えの関連を明らかにすることを目的としたものである。

平成 13 年 7 月から 12 月の間に S 市保健センターで老人保健法に基づく基本健康診査を受診した、40 歳から 85 歳の市民 918 人に対し、耳鼻科的な問診および診察、聴力検査を実施した人々を分析対象とした。

1 kHz の聴力レベル 30 dB 以下を 1.00 とする聴力障害の自覚のオッズ比 (性、年齢、騒音暴露、耳疾患、耳鳴、4 kHz の聴力レベルで調整) は、31~40 dB は 1.74 (95%信頼区間 1.02-2.96)、41~50 dB は 3.37 (95%信頼区間 1.28-8.87)、51 dB 以上は 4.97 (95%信頼区間 1.37-18.10) であった。4 kHz の聴力レベル 30 dB 以下を 1.00 とする聴力障害の自覚のオッズ比 (性、年齢、騒音暴露、耳疾患、耳鳴、1 kHz の聴力レベルで調整) は、31~40 dB は 1.53 (95%信頼区間 0.94-2.48)、41~50 dB は 2.59 (95%信頼区間 1.47-4.54)、51 dB 以上は 1.83 (95%信頼区間 1.05-3.19) であり、4 kHz は 1 kHz に比べて聴力障害が強くなっても自覚の訴えとして現れにくい傾向があることを示唆した。

本研究は、地域において 4 kHz が 1 kHz に比べて聴力障害の頻度が高いが、騒音暴露、耳疾患、耳鳴などの影響を除くと 1 kHz に比べて自覚の訴えがない、という知見をロジスティック回帰分析を用いて示したものであり、広く一般住民における聴力障害の実態を明らかにしたものととして貴重であり、学位の授与に値すると考えられる。